

飼い主の意識を変えることで遺棄数は減るのか？

3年1組19番 新田翔子
3年1組23番 樋口一花

Keyword:「犬」「遺棄」「しつけ」「飼育放棄」「飼い主」

1. はじめに

新田翔子

過去の経験より、近所の犬の飢餓への進行を直に感じ、理解を深め対策を考えることが私にできる唯一のことだと考えた。高齢化社会で認知症が原因の保護犬を減らすことは私たちの未来、私たちにも訪れる深刻な問題である。そして犬と認知症患者の関係が長期的に生活するための最適な方法と関係を支援するために必要な環境や設備を明らかにしてこれから飼い主とペットの関係をより良くしたい。そのためには何をするべきか思案したい。

樋口一花

個人的な都合や理由で、大切なペットが簡単に捨てられているという現状の改善に向け、『動物実験廃止・全国ネットワーク』の記事を読み、噛みグセや夜鳴きなどの犬のしつけ不足が原因で遺棄されていることを知った。犬よりも人間を変える方が難しくない上、飼い主が正しい知識とトレーニングを身につけることで、これらの問題行動を防ぐことができると考え、社会に適切な犬のしつけ方法を発信することを主に探究を行った。

2. 序論

新田は「犬と認知症患者にとって最適な環境を整えることが、飼育放棄の減少につながるのだろうか？」

樋口は「犬のしつけを徹底することで遺棄数は減るのか？」という問い合わせ、環境や意識を変えれば飼育放棄や遺棄数は減少すると思うという予想を立て、100人を対象にアンケートをとり、保護犬施設の調査のためにピースワンコ・ジャパン生駒譲渡センターを訪れた。

3. 本論

100人を対象に実施したアンケート「買う前に必要だと思うことは？」に対する結果が、お金36%、愛34%、理解27%、家(設備)3%であった。お金が最も多く、ペットの生涯にわたる食事代、医療費、日用品などの経済的な負担能力を重視する人が多いことがわかった。僅差である愛は、ペットに対する精神的なケアや愛情もお金と同じくらい不可欠な要素として認知されている。結果より、経済的な基盤と精神的なつながりの両方が飼育の土台として最も重要だと考えられていることを示している。この結果より多くの人はお金と愛の重要性を認識しているため、今後は具体的な知識や理解の重要性を具体的な終生飼育に必要な情報を発信し、啓発していくと考えた。

情報発信を目的に、ピースワンコ・ジャパン生駒譲渡センターにて、しつけや実施している活動に関する資料を提供してもらった。その情報や調べをもとに、SNS活動を始めた。しつけに関する情報(写真1)や、独自でまとめた犬の性格とmbti (Myers-Briggs type indicator 自己申告型心理学アンケート)とを照応し、資料(写真2)を作った。フィードバックとして、フォロワーさんのしつけ状態に加え、参考になったという好評を得た。

Instagramに掲載したこれまでの投稿を通して、犬への理解が深まったかというアンケートをとり、100%役に立ったという結果が得られた。

4. 結論

新田は、高齢化社会における認知症患者と犬の共生という視点から、最適な環境整備と関係性構築の必要性を見出した。また、実施したアンケート結果からも、飼い主がペットを迎えるにあたり、「お金(経済力)」と「愛(精神的ケア・愛情)」が飼育の土台として最も重要であるという認識が一般に広く浸透していることが明らかになった。この結果は、「飢餓への進行を直に感じ、理解を深め対策を考える」という問題意識の背景に、経済的な負担や精神的なつながりがかけていることを表している。

一方で、樋口は、飼育放棄の原因として挙げられる「しつけ不足による問題行動」を防ぐため、「正しい知識とトレーニングの必要性」に焦点を当てた探究を行った。情報発信活動として、保護犬施設での調査や、犬の性格とMBTIを照応させた資料作成、そしてSNSを通じた啓発活動を実施し、フォロワーからの好評を得た。このフィードバックは、飼い主側が具体的なしつけ方法や犬への理解を深める情報に対して高い関心を持っていることを示しており、飼い主の意識改革と知識の習得が遺棄の減少に繋がる可能性が高いことを結論づけている。

5. おわりに

新田翔子

当初、近所の犬の飢餓という個人的な経験から問題意識を持っていた私は、個人の感情的な問題として捉えがちだった。しかし、探究を通じて認知症患者と犬の共生という視点や、アンケート結果に示された「お金」と「愛」の重要性を知ることで、この問題が高齢化社会というより広範で深刻な構造的問題と結びついていることを理解した。この変容から、これからは、個人の感情的な共感を社会的な構造へと繋げることである。単に保護犬をかわいがるだけでなく、飼育放棄を未然に防ぐための環境・設備支援や、認知症患者とペットが共生するための具体的な仕組みづくりに、ボランティア活動を通じて関わっていきたいと思案した。特に、終生飼育を支えるための経済的な負担軽減策や、高齢者とペットの安心・安全を両立させるコミュニティの形成に貢献することが、私にできる新たな目標だと考えている。

樋口一花

私は「噛みグセや夜鳴きなどのしつけ不足」という行動面に焦点を当て、「人間を変える方が難しくない」という現実的かつ実践的なアプローチから探究を始めた。活動を通して、しつけ方法の情報を提供するだけでなく、犬の性格と話題性のあるMBTIを照応させることで犬に関する理解を深め、啓発活動の効果を実感した。

これから私の生き方は、「知識を具体的な行動と結びつける」ことだ。正しい知識を持っているだけでは不十分で、それをいかに飼い主の「実践する」という行動に繋がるかが重要である。今後は、単なる情報発信に留まらず具体的なトレーニング方法を実践形式で共有したり、オンラインでの相談窓口を設けたりするなど、飼い主と犬の関係をさらに支援する方法を考えたい。

この探究は個々が異なる問題意識からスタートしたが、最終的に経済・愛情の基盤と知識・理解の普及という二つの点が必要不可欠であるという共通の結論に至った。この経験を活かし、今後も互いの視点を尊重し、連携を取りながら、より良い人間と動物の関係性を築くための社会貢献を続けたい。

6. 参考文献・出典

AVA-net「飼い主が動物を捨てる理由とは?」『動物実験廃止・全国ネットワーク』。

<https://web.archive.org/web/20240623070649/http://www.ava-net.net/report/105-hikitor.html>.

2004年5月

奥田順之、市川哲、坂本麻友、志村茉耶、濱口真帆、加藤有理、綾瀬歌萌、野瀬紹未、上田耕太「犬の飼育放棄問題に関する調査から考察した飼育放棄の背景と対策」NPO 法人と動物の共生センター、岐阜大学 学生団体ドリームボックス。

<http://hasc.sakura.ne.jp/1311-repo.pdf>.2016年1月14日

写真1

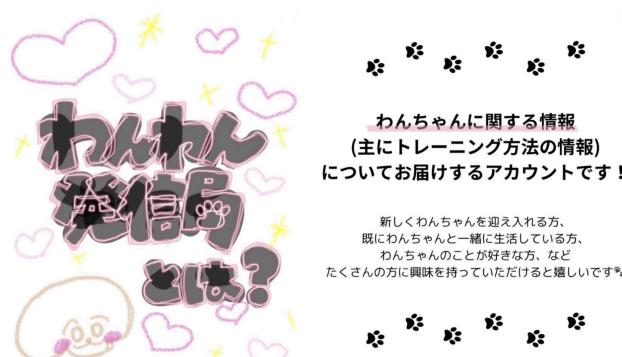


写真2

